

第2回習志野・八千代・船橋地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年9月27日（水） 午後2時から3時40分まで
- 2 場 所 千葉工業大学 津田沼キャンパス 5号館6階会議室
- 3 出席者 10名／15名
- 4 概 要

（1）第1回習志野・八千代・船橋地区地域協議会の記録（案）について

委員に確認し、承認

【座 長】

前回、事務局から地域協議会の趣旨、プラン及びプログラムについて、そして習志野・八千代・船橋地区の県立高校の現状と課題について、説明があった。前回の説明を踏まえて、今回は具体的に協議を進めていくが、事務局から資料が出ているので、まずは資料の説明をお願いする。また、委員から、「どういった視点で議論をしていったらいいかが示されると、発言がしやすくなる」といった意見もいただいているため、事務局から議論の進め方について何か提案があれば、合わせてお願いする。

（2）習志野・八千代・船橋地区に所在する県立高校の在り方について

「資料1 第2回地域協議会スライド資料」、「資料2 習志野・八千代・船橋地区における学科及びコース等の設置状況」に基づき、この地区における学科及びコース等の設置状況について、「参考 県立高校学校紹介リーフレット（第2学区）」に基づき、地区内の各校の取組についてそれぞれ説明するとともに、この地区の県立高校に今後必要とされる学びは何かについて事務局より論点を提示

【座 長】

ただいま事務局から、議論の進め方について論点の提示があったが、いかがか。

（異議なし）

それでは、提案していただいた形で進めていく。では、一つ目の論点について、事務局から引き続き説明をお願いする。

（3）全日制・定時制・通信制の望ましい在り方について

資料1「第2回地域協議会スライド資料」に基づき事務局より説明

【座 長】

ただいま事務局から論点について、提示があった。少子化で高校生の母数は減っているが、ニーズは多様化している。コンディション、例えば言語や家庭環境、保護者対応、障害等あらゆる状況が考えられるようになった。障害については、法的な整備が進み、従来よりも包括的に捉えるようになってきている。合理的配慮の幅も増えている。そういった意味ではここ数年で考えなければいけないことが増えている。委員の皆様の経験や今の立場に即して、発言いただけたらと思う。こういう場なので、それぞれ個々の個人的な意見でもよい。

【委 員】

普通高校に勤務し、今の説明を伺って頭に浮かんだことを率直に述べる。私が中学生のときは、偏差値で輪切りにしていた。ホームページもなかったため、あるのは数字だけだった。教員になり、自分の学校の様子や魅力を伝えるということが始まった。学校のことがわからないまま、入学するべきではない。過去の勤務校では、自己啓発指導重点校ということで県から指定を受け、生活指導等に力を入れた。40人のクラスだったが、卒業までに多くの生徒の転学退学があった。しかし、中学校の先生や周りからもっと厳しい指導してほしいといった意見もあった。その頃は、徹底して厳しい生徒指導で進めていた。その勤務校は、地域的なものからか、家庭環境が厳しい生徒が多かった。様々な困難に直面する生徒にそういった指導をすることで、子どもたちの安全が保障される、守られている学校づくりを進め、安心

して授業が受けられる学校になった。学び直しという言葉が先ほど出てきたが、勉強が苦手な生徒が多く、通常の教科書だと難しいので、先生方で手作りの教材を作った。授業が行われている1つのクラスに3人の先生が入り、空いている時間は教材を作って、終わったら採点してと忙しい日々だった。子どもたちに合った教材だったので、1枚課題を解いたら手を挙げて、2枚目の課題をもらって、3枚4枚と課題が評価されていくので、自分たちもやればできるんじゃないかというような自己評価が上がっていく教材であった。それが当時、全国的に評価を受けて、各地から授業見学に来ていた。人が来ると子どもたちは喜ぶ。自分たちの活動は全国的に評価されていると認識した。また、自分の気持ちが変わっていくという自覚もあった。子どもたちが学校に来て、自分たちの変化を感じ、周りに認められることで自信がついて、そして卒業していくということが学校の役目ではないか。次に勤務した園芸科がある学校では、1クラスだが、自分たちで野菜を育てて、それを売っていた。楽しそうにやっていた。頑張っている生徒たちは進路もいいところに行っていた。そんな経験がある。

【座 長】

長い経験の中で、問題のある生徒の傾向というのは変わってきているのか。対応が必要な生徒の状況に変化はあったか。

【委 員】

だんだんと辞めていくと言ったが、残った子たちが、ここまで来たんだから頑張ろうと言っていたことを覚えている。ルールを守ることが苦手な子たちは多かったが、そのルールや制限の中で、でも頑張っていこう、卒業しようと言っていた。社会に出て、やはり学校にあるようなルールを守るということは必要である。彼らはそれを学べたのではないかと思っている。

【座 長】

高校生の様子が変わってきていることがわかる。できればまず同種のお話を伺いたい。

【委 員】

具体的な子どもたちの変化や指導などの観点をもう少し広く捉えて、今の問題点として考えることで、話ができることがある。子どもたちのニーズが多様化していると、先ほど繰り返し出てきていたが、本校でも馴染めないで離脱する生徒が残念ながらいる。そういう子たちを見ると、スマホ依存で深夜まで起きていて、全日制になじむことができないということがある。社会としては、それを許容するシステム、受け皿ができてきている。例えば、もう高校だけに限らず、大学や全世界的にもオンライン化が進むことによって学び方が相当多様化している。以前は、全日制の学校に行って一人前というような基準があった。それは崩れている。私立の広域通信制高校があつという間に席卷した。そこは、最先端の技術を使って非常にユニークな面白い先生の授業をビデオ形式にして、繰り返し再生できるため、教員の展開力は必要がなく、一番強いコンテンツとなっている。例えば同じ教科でも学校では人気のある先生もいれば、そうではない先生もいる。(通信制は)その人気がある先生のコンテンツのみで勝負できる。脅威ではある。しかし、そういうものを選ぶことができるということは、普通になっている。色々な学び方がある。先ほど示された全日制・定時制・通信制という選択肢の外にもある。例えばインターナショナルスクールでは、最近企業も対応していて、とんでもないお金をかけて、そして学費も年間300万、400万とかかる学校が、国内にできてきている。長野などでは今、開校ラッシュと聞いている。世界的なトレンドとかビジネストレンドを捉えた上で、そこで良いとされているものがお金がかかるけど出てきている。プログラムとしては面白そうなことではあるが、全日制の学校が対応することは厳しい。日本のルール外の学校ができていて、そこに本当のお金持ちの方とか、本当に教育に関心がある方が無理をしてローンを組んででも行かせるというのが流れとしてある。その中で、この千葉県の地区で、公立学校がどのような学校を目指すのか。

【座 長】

ICTと教育の関係性として、つながりが二極化している。1つは最初の方で言っていた、例えば不登校生徒や、かつて問題生徒と言われていたところのゾーンが、どちらが原因で結果なのかかわからないが、インターネットやスマホ依存、ゲーム依存となり、SNSにつながるアンダーの話と、後半の方でおっしゃっていた金持ちとかトップの生徒が、ガラパゴス化した日本の教育を相手にしないとなっている。その両方にネットが接続してしまっている。

中学校の話も伺いたい。

【委 員】

会議の冒頭からあったが、確かに不登校児童生徒が増えており、そういう子たちが家の中にこもっている中でゲーム依存やアニメが好きというケースは非常に多く見受けられる。完全に不登校だったアニメ好きの生徒が、学校行事の声優の講演会をきっかけに、少しずつ登校して別室で勉強するようになり、高校、大学と進むことができたことがあった。不登校の子供たちは、大体小学校二、三年生ぐらいでつまずいて、中学に上がってきたときには全く勉強を何年もやってない状況であることも多い。そこから学校に来ようと言っても、なかなか難しい。タッチ登校と言って学校に来て先生に会ったら教育的配慮で出席にすることもあるが、それもできない子もいる。髪の毛も切らず、すごく伸びている子もいた。そういう子たちの中には今でもひきこもりをしている子もいるし、ゲーム依存していた子の中には、全く登校できなくて、高校も入れるところに行きたいと言って入ったが、2日で辞めた子もいた。そんな指導でいいのかと思っていたが、高校に交流人事で行ったときに、やはりこれでは駄目だと再認識した。しっかりと目的意識を持つということ、高校に何をしに行くのかということをしちゃんと指導した上で高校に行かせなければ駄目だということを再確認した。確かに長欠気味の子の中にはネットに依存している子も多い。外国の労働力を頼らなければいけない状況の中で、様々な国の子供たちが学校にはいる。それに対して教育が追いついていかない。外国人を受け入れられる、センター校のようなものを作っている市町村もあるが、高校にもあったら嬉しい。市では対応できないぐらい様々な国々から来ているため、言語指導が追い付かない。言葉が伝わらないから、文化の違いも教えてあげられないし、勉強どころではない。その辺りは厳しいと思う。

【座 長】

高校のカラーをどのように色付けていくかというような展望に立つ必要がある。例えばアニメやゲームなどサブカルチャー方面は、今の（県内県立高校の学科やコースなどの）ラインナップにはない。サブカルチャー的な色をつけるというのは、ありではある。ただ、そういったサブカルチャーの先にある仕事は労働環境が過酷な場合があり、やりがい搾取のもとに、掃き捨てられるという構造になっている可能性も否定できない。そういった業界に、下働きで就職する子というのは、自分でその進路の判断能力はあまり持っていない。親も含めて、結局階層化のようなことの手助けをしてしまっているのではない。ただ出口がないよりはよいなど、意見は色々ある。先ほど、委員がおっしゃったような、社会のルールの中でちゃんと生きていくためには、自分もそこに合わせていかなければいけない。あるいは、そのものを構築していくだけの力が必要だということがある。そういった理解をつけさせるという場も必要だし、ただそれだけでやるとそこにも入れない層の生徒の受け皿がなくなって、それを放置してもいいのかという懸念もある。

【委 員】

県立の学校でまとめて考えることは難しい。層が広いので、全てを吸収するモデルというのはなかなか作れない。

【座 長】

感覚としては、例えば色々なセクターなどがあったら、教育コンテンツを提供して、それを貼り合わせて、各自でカスタマイズするようなこともありである。

【委 員】

マグネットスクールというものがアメリカにあって、一つの学校の建物の中に小さい学校が5校くらい入っているイメージのものがある。それぞれ色々なことに特化している学校である。その中にサブカル的なものも考えられるとよいのではないか。学校に行くことがかつて目的になっていたが、学校でやりたいことをまず作ってあげることも必要である。教育委員会で提示されているように、専門的な世界もあっていいと思うし、両方のバランスをとってもよいのではないか。

【座 長】

もう今はほとんどの人にとって高校が最後ではない。高校に3年間通わないことのリスクは共有できているが、行くことで何がプラスになるかはわかっていない。この学区が、普通科へ極端に傾いているが、そこを出発点にするという話にならないのではないか。できれば、地域の実情をお話いただいて、どんな方法でもいいので、こんな方法もあるかもしれないというような提案をいただければありがたい。

【委 員】

計画を練り上げて、完璧なものを作ってやっていくことが実際無理な時代に入っている。なので、どんどんやってみて、撤収するところを見極めることができていけばよいのではないか。3年、5年もしくは10年ぐらいでやってみる。1回始めてしまうと畳めないというような形で、県立に縛りがあるのだとするならば、それは今、置いておいた方がよい。ビジネス界でも先読みできないと言われている状況で、この先10年20年30年の制度設計をするというのは、不可能ではないか。したがって、やることはどんどんやってみたらいいと思う。その上で、どこかで見極めポイントを設定しておいて、これだったら撤収するということができるとよい。学校は残すが、コースは変えるということも想定される。畳み方もある程度想定しておく。それができれば魅力的にできるのではないか。私立は、校長の判断が大きい、県の教育委員会のような大きい組織で、様々なリーダーが絡んでくると止められない。

今、明らかに基軸メディアが紙と文字ではなくてビデオになっている。子どもたちも小学生中学生の時からスマホで作業することが多い。検索をかけるときに、大人はGoogleを使うが、子どもたちはYouTubeやTikTokで検索する。例えばそのビデオを基軸とした学びのスタイルがあってもいいと思う。サブカルとまではいかなくてもそういったところを含んだものや、例えばもっとICTが従来の情報教育とつながってもよい。まずは試していった、方向転換もできるというぐらいのバランスがあると良い。

【座 長】

今、YouTubeでも15分だと長いとなっている。世界ではTikTokの70秒で動いてる。それに慣れると50分授業が長く感じられてしまう。大学の120分間はもう拷問だと感じると思う。(コロナ禍で)2020年のイレギュラー時に、学校も分散登校などで、クローズという事態が相次いだ。一番直撃を受けたのは、特別活動などの学校行事や生徒会活動である。多くの学校で、オンライン文化祭なども行われたが、生徒自身に取り組むことが増えた。先生より生徒の方がコンピューターを扱える。生徒の想像力とプログラミング力は、各学校が努力されて、魅力的な取組をしている。

【委 員】

コロナ対応については、当校はBYODで、1人1台になって5年目であったので問題なかった。もう子どもたちがみんなやってくれる。子どもの方が詳しい。子どもたちの創造性や対応力の早さとか吸収力が本当に尋常ではない。そういったところで、彼らの力が発揮されていいと思うし、色々なところに今までと違う形で子どもたちが活躍できる場ができつつもあると思う。そういったものも取り込んで、従来のモデルをそのままやるのではなく、全部変えられないとは思いますが、少しずつ変えられるところは

変えたら良い。県立の場合には、足並み揃えとか、色々問題があって大変だと思うが、動かしていい範囲があると思うので、そういったところである程度裁量権を与えとか、様々なアイデアを活かせるようになれば良い。校長先生が独自でやれるような裁量権を持てると、現場としては動きやすいと思う。若い先生と一緒にやろうと言っても、許可が出ないとやる気も何もなくなってしまう。

(4) 社会に開かれた教育課程の実現、探究・文理横断・実践的な学びの推進について

【座長】

話としては、議論の後半部分に入っている。高等学校の中身をどうするかという学びの中身の話である。はっきり区切ることはないので、このまま区切らず委員の皆様から色々なお話を伺いたい。

【委員】

保護者の立場としては、ちょうど秋の今ぐらいの時期は進路について悩む時期である。学校からは、何になりたいか、どういう目的を持ってこの進路に進みたいかと聞かれる。中学3年生でそれを明確に持っている子はなかなかいない。大人だってこの先どうするのか、どうなっていくのかと聞かれたときに明確な答えができない中で、子どもに目的を持ってということが出来るのか。目的を早くから持っている子というのは、その目的に向かっていくことができると思うが、大半の子は目的を持てておらず、何になりたいかということも想像できていない状況である。自分たちが子どもの頃は、一部上場企業に行けば安泰という時代だったが、今は簡単に上場企業でも潰れる時代である。例えば、工業高校に行っていたとしたら他の分野に転職できたのかは不安に思う。先ほど話にあったように、基本からずれたときに、また戻れる方がよい。親の立場として言えば、工業科やスポーツ科に行ったら、進路に迷ったときにどうなるのかというのは思う。普通科は一般的に安心できるのではないかな。2年生3年生となったときに、コースの選択として普通科でも情報系や工業系を選べるということはよい。ただ、そこでいきなりサブカルチャーのコースと言われたら、子どもはいいと言っても、親も正解がわからないので、心配にはなる。公立の普通科に行くと、安心という部分はある。

【委員】

中学校では、高校に進学するはっきりした目的を持つという将来設計まで考えられている子は非常に少ない。面接練習をした時に、高校の特色やなぜ受けるのか理由を聞くと答えられるが、将来の夢が何かは答えられないことが多い。そのときに指導する側としては、それはそれでいいと思っている。まだはっきり将来についてわからなくても、高校に行って勉強しながら自分の夢を探すでもいい。自分は何が向いているのか、自分は何をしたいのかというのを、基礎的な学力を培いながら探せばいいという話をし、面接でもそうやって答えるようアドバイスする。私が大学受験をしたときは、文教大学の初等科が全国で一番倍率が高かった。先ほど、教員基礎コースで勉強できると聞いて、こういうコースに入れたらよかったなと思った。船橋市内のある高校では、かつて生徒指導が大変な時期があったが、厳しい状況の中で立て直した。当時若かった先生が、みんなで奮起してチームワークよく指導していて、進路決定率が上がったという話を聞いた。高校のリーフレットやパンフレットを見たときに、進学率が優先されるが、その学校は他とは違って、就職が良かった。こういう生徒が欲しいという高校側の期待する生徒像が明確にあった。その学校を卒業するときの出口が見えていた。中学校でも勉強は嫌いだけど高校までの勉強はやってみたい。でもその先はさすがにもう勉強は嫌で、就職して家計を助けたい。そういった子たちには安心して勧めていた。普通科で進学ばかり求めるところを、他の学校との差別化で、その高校はこういうことに特化しようと多分されていたと思う。子どもたちも満足して自分の道を切り拓いていけた。今も大学進学ばかりで、学力を子どもが一番気にしている。結局は大学進学を意識していることが多い中、就職希望者に対する手厚い指導を売りにした高校が1校ぐらいあっても、人が集まるような気はする。自己推薦入試で、作文を書けば入れる大学もあるが、それでいいのかと思っていた。時代に合ったものとか子どものニーズに合ったものとか、何を作ればいいのかははっきり言えないが、

1つの例として話をさせてもらった。

【座長】

二つ目の論点の話は、国でも言われているキーワードである。平成30年の学習指導要領も今の高校1、2年生で実施が進んでいて、来年で完成する。高校の勉強はどちらかというと抽象的で理論的である。これは社会の中でこういう分野で使われる。三角関数って何をするときを使うか知っているかというような話がある。今の高校のカリキュラムというのは、1年生で大体その各教科の基礎をやって、2年、3年で探究をするという構造になっている。理想は各自生徒が問題意識を持ち、自分のテーマを持って、各自のペースで学びを深めていくという、生徒ベースの学びである。そうしないと、日本の場合は例えばトップ進学校から一流大学に行ったとしても、国際的に使えないと聞く。要するにそれを自分の本当の学力にできていない、受験学力で終わってしまっているから、経済界でも危機感を持っている。文理横断も文系理系という時代ではなくて、例えば、ゲームを作る側になるには、そのコンテンツに対する美術や歴史や文学などの想像力が必要である。本屋でも情報は集められるが、誰かと一緒にやればいい。高校はそういう出会いの場でもあるし、自分の適性や専門が見えてくる。こういう横断みたいなものは、高校も中学校も教科別に先生がいて、そこを飛び越えるのはなかなか難しいので、複数のクラスを合体させてセッションをしてみる。例えば今、総合的な探究の時間というのがあり、割と学校裁量で横断的はプログラムを作れるようになっている。理数探究というさらに新しい科目もできている。これで理系エリートを育てると国は言っているが、大学としてもそういった時間などで連携できればと考えている。難しいことを言っているようではあるが、国も今の議論と方向は似ている。何とかしたい。特に高校ならではの、その段階と特色を生かした学びを考えていきたい。

【委員】

先ほど、職業を選択しきれないという話があったが、その通りである。私達の学校でもその問題はあり、入試説明会で中学生に話しているのは、本校では職業観は問わないことにしている。キャリアデザインみたいなことを言って、すぐ何か職業をまず置いて、そこに至るまでにどうしたらいいかと前倒ししていったら、今何するべきかという議論になるが、少し違和感がある。みんなが共にあってほしいのは、自分はどう生きるかであったり、何に価値を持つかであったり、どういう課題があるかである。話をするとき、実際その職業観ではなくて、自分の興味関心を中心である。でもそのときに節目節目で、自分は何がしたいのか、何が大事なのか、そういう問いと共に生きていくということが大事だと思っている。なので、決めきれないというのも、もちろんある。普通科改革というのがあるが、これはどういう意味で取るか。改めて文科省が戦後、経験主義から系統主義に移行していったら、教科系統主義に移行していった縦割りになった。そしてその縦割りになって学習して、ルールができて検定教科書ができてということが、歴史としてある。その中であって、この教科の縛りが非常に強い。先ほどおっしゃったように、この中において、特別活動として、人と人が出会って様々な経験をして、気づきがある。そういうものを失ってしまっても学校としては成り立つような教科の授業だけをやってたということがあった。改めて普通科改革というところを考えると、普通って何というところをまずちゃんと自分たちで掘り下げることが必要だと思う。この普通科のバージョン2.0じゃないが、もっと今もAIがこれだけあってChat GPTが席卷していて、便利になってきているが、個々に個性があるように、人間性みたいなのが必要だと改めて戻るのはないかという気がする。感情とか感性とか創造性とか、そういったところを考えていったときに、その時代を見据えた普通科って何なんだろうと考えたら、教育に携わる者として、その心の部分はとても大切になってくるのだと思う。子どもたちの心と向き合うことが、大切なことなんじゃないかと思う。もちろん技術には対応していく。ただ時代の変遷に対応するのではなく、啓蒙して深めていったらいいのではないか。この今回の計画というのは、ある意味第1段階であり、これまでやってきた特徴を出す必要がある。普通科をもう1回掘り下げるところで、その子ども

たちのあり方とか、人生観とか、そういったものをちゃんと向き合える時間をどう取っていくのかというところが大切なのではないか。千葉県では、森田健作知事のもとで、高等学校で道徳を入れるというのもあった。道徳とは誰かが決めた倫理規範に基づく。でも、人の世界はそれだけではない。改めて自分たちで自分たちの今のあり方ってどうなんだろうとか、ヨーロッパでは哲学という教科が入っているが、そういったところも含めて、テクノロジーと非常に人間くさい人文科学的なところの両方をうまく考えていかなければいけない。アメリカで実際サンフランシスコ近辺にできた学校が、本当に色々な観点が入っている。例えば風車のデザインを Adobe Illustrator を使って、中学校 1 年生の子たちが歯車をデザインして、誰が一番多く発電できるものを作るかということをやっている。自分たちの感覚で実際に切り出して作って、風力実験場に持って行って、実際に風を受けてどれだけ発電するかというような学びである。議論じゃなくてまず作ることが先で、みんなで作った後で、他にこういうこともあるという話ができると、すごく深い理解があり創造性が高まる。義務教育に関してはちょっとアプローチが違うなと思った。最近九州の学校などでは、ロボティクスも非常に力を入れている。高等学校普通科でしっかりとそういうのを設けることができたときに、本当の意味で普通科の新しい形が見えてくるのではないかと思う。

【座 長】

今のお話だと、さっき議論になったオンラインという話ともつながる。選択できる形で、オンラインで学んでも、終わった後に、改めて大学とかで人と交わっていくのかもしれないし、でもどこかで自分の心と向き合っていかなければいけないと思う。そういうときのチャンスが与えられればいいと思う。

【委 員】

日本はみんな小中高大の順番に行く。専門に行って就職しても順番通りだが、結構海外では、一旦退学してお金を貯めて、また戻ることもある。いろんな人生の設計の仕方があって、ようやく日本でも少し多様性が出てきたというのは、生き方が変わってきたのかと思う。我々が当たり前だと思っていた順番通りに学校に進んでいって就職する者がいるではなくて、もっといろいろな形をちゃんと認めてあげるということも親切心だと思う。社会人の先輩として苦労するから、後で勉強することはお金がかかるし大変だよと言えるが、でもそれによって子どもたちの可能性を奪っていないか。その何かやろうと思ったらチャンスとかその行動を潰してはいけないのではないかと思う。失敗してそこで終わりではない。それが糧となって、その後たくましく、骨太で生きていけるとよいが、時にその行動に吹き飛ばされるかもしれない。しかし、それこそ社会でケアするという仕組み作りの中で、ある程度対応していく必要がある。彼らを選択して何でもやらせたらいい。でも失敗したときに、次はどうしたらいいのか。そういったところで新たにまとめると。(専科ではなく様々なことに挑戦できる) 普通科っていうところもあるよという設計とか、従来の日本で作られてきた仕組みじゃなく、もう 1 回普通科とは何かということ掘り下げられたらなと思う。

【座 長】

ここで欠席された委員からの意見を事務局から紹介してもらう。

《事務局》

委員より意見をいただいている。県立高校を取り巻く情勢として、少子化、人口減少社会を迎え、子どもの取り扱いになっている。これは避けることのできない状況で、かつ、今後 30 年以上は続く状況になると思われる。学びの多様化については、私立高校への進学について、国や県の就学援助制度により、金銭面のハードルが下がっている。また、単願、併願と、推薦での入学がしやすくなっている。これらから、一発試験の県立高校と比較して、確実に進学できる方法を選ぶ傾向にある。それと同時に通信制やフリースクールなど選択肢も増えている。大学進学率も向上し、高校の選択にあたっては、大学に進学できるかどうか重要視されるようになっている。就職するにあたっては、大卒を採用する傾向

が強い。学校運営の差については、高校の選択の条件として、校舎が新しい、設備が整っている、制服のデザインなどが関係しており、県立高校は私立高校に比べ校舎設備等で古くなっているという感が否めない。これは市立高校でも懸案となっている。また学力の格差については子どもの貧困が問題視されており、幼少期からの教育環境の格差が広がり、子どもたちの学力の格差に繋がっている。

今後の少子化、人口減少社会を踏まえると、高等学校の数、規模を縮小していくことはなかなか止めることは難しい。今顕在化していなくても近い将来には顕在化すると思われる。高校も淘汰される時代が近づいている。私立への進学ハードルが下がっている状況、学びが多様化している状況から、県立高校を取り巻く情勢はますます厳しくなり、競争が激化する。一方で、学力の格差が広がっており、公立としての役割、高等教育の受け皿としての役割はますます重要となっている。これらを踏まえ、県が示している改革プランの中で次の点に力を進めたらどうかと感じている。1点目は他の学びとの差別化を図るためのキャリア教育と職業教育の充実、専門学科やコースの拡充。2点目としては選ばれる学校となるように、教育環境の整備、特に施設設備の更新充実。3点目は、子どもたちや地域に与える影響は大きいものの、やはり丁寧かつ慎重に検討する中で、県立高校の適正規模、適正配置について考えていかなければならない。

(5) 少子化が加速する地域における高等学校教育の在り方について

資料1「第2回地域協議会スライド資料」に基づき事務局より説明

《事務局》

今回のテーマは、適正規模・適正配置の観点から、今後の県立高校の在り方についてとしたい。習志野・八千代・船橋地区においては、今後10年で劇的に減少が見込まれている訳ではないものの、段階的に生徒数の減少が見込まれている。現在開催中の9月定例県議会の中で、八千代市における住宅建設に伴う小中学校の教室不足の問題に関連して、地域協議会の進捗を尋ねる質問もあった。地域における高校の在り方は、所在する市町の街づくりや小中学校の将来計画にも密接に関連している。

これらのことから、各市の行政機関から選出された委員の方々には、今後の街づくり計画や地域活性化に向けた対策について、各市の教育委員会から選出された委員の方々には、それぞれの市の小中学校の将来計画について、それぞれ次回会議のはじめに簡単に説明していただきたい。各市の将来像を踏まえたうえで、今回はこの地区における県立高校の適正規模・適正配置について意見をいただきたい。

【座長】

ただいま事務局から提示された3つ目の論点については、各市からの説明を踏まえて次回協議をしていただきたいという事務局からの提案だが、いかがか。

(異議なし)

それでは、各市の行政機関および教育委員会については、次回の会議の冒頭で説明をお願いします。その他、何か議題はあるか。

特に無いようなので、以上で、第2回習志野・八千代・船橋地区地域協議会の議事を終了する。